

学習予定日	月	日
学習日	月	日

1-7 利益が出てきた原因を知る損益計算書

今日のキーワード

収益↻

純資産の増加する原因のうち、資本の払い込み（増資）以外のもの。売上高や受取利息など。

費用↻

純資産の減少する原因のうち、資本の払い戻し（減資）や利益処分以外のもの。売上原価、販売費、支払利息など。

利益↻

収益から費用を差し引いた正味の利益のこと。

損益計算書等式↻

費用+利益=収益
つまり
収益-費用=利益

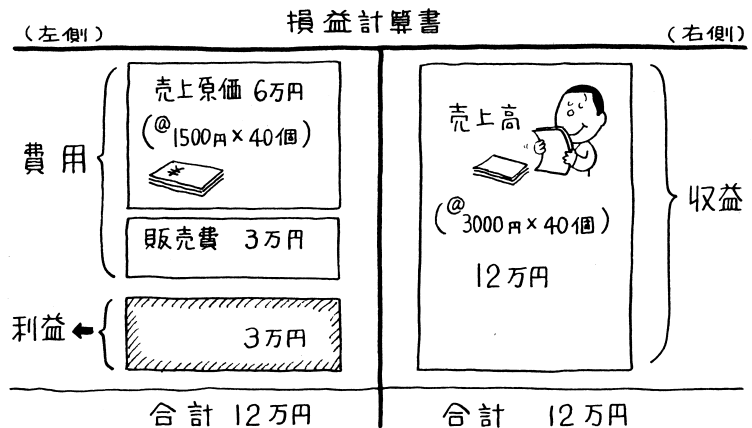
B君は、1ヵ月がんばって、合計40個のファッション小物を売りました。

また、この間に、車のガソリン代やチラシ広告などの費用（販売費）が3万円かかりました。これを損益計算書にまとめてみましょう。

損益計算書では、**↻収益**である売上高は右側に、**↻費用**である売上原価と販売費は左側に並べます。貸借対照表では、純資産の場所は右側と決めていたので、この純資産の増加をもたらす収益は右側に、反対に減少をもたらす費用は左側におくわけです。

それでは、収益から費用を差し引いてみましょう。

左側に3万円の**↻利益**が算出されます。



このようにしてできるのが損益計算書です。(上図)。

貸借対照表には、資産=負債+純資産(資本)という等式がありましたが、損益計算書でも、左側と右側との間に次のような等式が成り立ちます。

費用+利益=収益…これを**↻損益計算書等式**という。

損益計算書を見ると、利益つまり純資産の増加の原因がよく分かります。

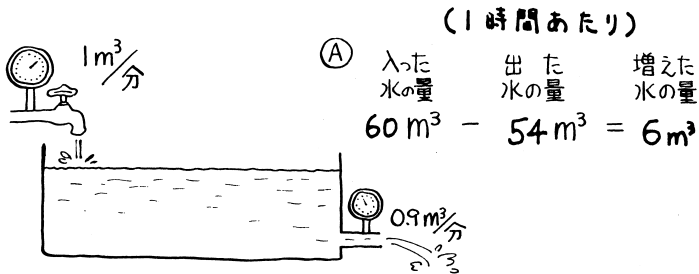
B君はこれを見て、「販売にかかった3万円の費用をもっと節約していれば、利益がもっと多くなったんだな」と思い、今後はもう少し販売費を節約する工夫をしてみようと考えています。

キーワード・コネクション

プールの水の量はどれだけ増えたのだろうか？

ある市営プールでは、毎分 1 m^3 の水を入れながら、毎分 0.9 m^3 の水を流している。さて、1時間たったら、このプールの水の量はどれだけ増えているだろうか？

これは、次の図の通り、入ってきた水の量と出ていった水の量の差で計算することができる。



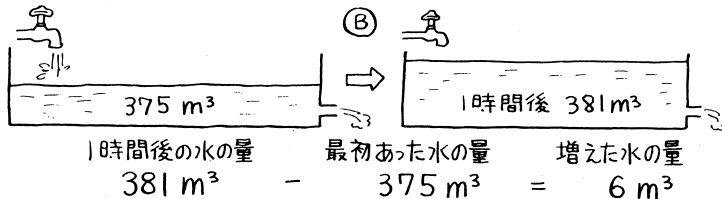
上記と同じ考え方で、損益計算書は、次のようにして利益を計算する。

$$\begin{array}{rcc} \text{入った水の量} & - & \text{出た水の量} = \text{増えた水の量} \\ \text{(収益)} & & \text{(費用)} \quad \text{(利益)} \end{array}$$

この計算方法を**損益法**と呼ぶ。

このように水道メーターがついている場合は、入ってきた水の量と出ていった水の量が分かる。しかしメーターがない場合は、どうやって増えた量を調べればよいのだろうか。

その通り。貸借対照表から利益を計算したように、最初にあった水の量と1時間後の水の量とを比較すればよいのである。



$$\begin{array}{rcc} \text{1時間後の水の量} & - & \text{最初の水の量} = \text{増えた水の量} \\ \text{(期末純資産)} & - & \text{(期首純資産)} = \text{(利益)} \end{array}$$

という式で利益を計算する方法を**財産法**と呼んでいる。いずれにしても、出てく利益は一致する。

損益法

「収益－費用＝利益」という計算式によって利益を計算する方法。

財産法

「期末純資産－期首純資産＝利益」という計算式によって利益を計算する方法。

学習予定日	月	日
学習日	月	日

1-8 三つの収益、四つの費用、五つの利益

今日のキーワード

三つの収益

- (1) 売上高 (☞ 3-1)
- (2) 営業外収益 (☞ 3-5)
- (3) 特別利益 (☞ 3-6)

四つの費用

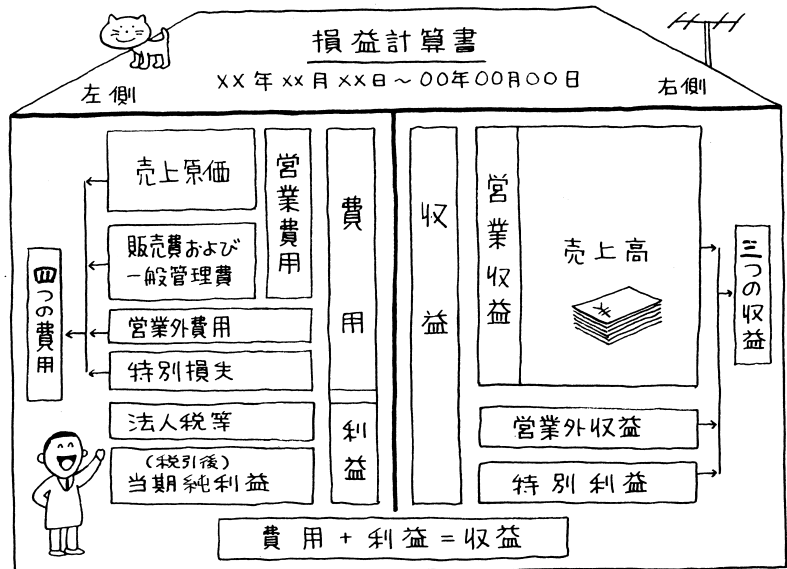
- (1) 売上原価 (☞ 3-2)
- (2) 販売費および一般管理費 (☞ 3-4)
- (3) 営業外費用 (☞ 3-5)
- (4) 特別損失 (☞ 3-6)

損益計算書は、一定期間における会社のフローを、収益と費用の2面から把握し、利益つまり純資産の増加がいくらだったのかを計算するものです。

損益計算書では、収益と費用を下図のように三つの収益と四つの費用に分けます。三つの収益のトップバッターは、会社のメインの営業活動による営業収益、つまり^{うりあげだか}売上高です。2番目は、受取利息など、メインの営業活動以外の収益、つまり^{えいぎょうがいしゅうえき}営業外収益です。これらの二つは、毎期経常的に発生するという点で似ています。

そして、3番目の^{とくべつりえき}特別利益は、毎期コンスタントに発生しない、特別の、臨時の、異常な収益です。これはたとえば、会社が長年持っていた土地を売ったときの売却益などを考えていただければよいでしょう。

四つの費用の方は、会社の本来の営業活動による営業費用を、さらに^{うりあげげんか}売上原価と^{はんばいひ}販売費および^{いっぽんかんりひ}一般管理費に大きくグループ分けします。また、収益と同じように支払利息などの^{えいぎょうがいひよう}営業外費用と、固定資産としての土地などを売って損が出たときのような^{とくべつそんしつ}特別損失とに区分します。



そして、この三つの収益と四つの費用から、5種類の利益が算出されます。それは、**売上総利益**、**営業利益**、**経常利益**、**税引前当期純利益**、**当期純利益**の5つです。何も5種類もの利益を算出しなくてもいいようなものですが、それぞれ意味のあるものなのです。

それぞれの詳しいことは「第3章 損益計算書を読む」のところで学習しますので、ここでは下図の説明を見て、全体のイメージを把握してください。

この三つの収益と四つの費用を上から下へと並べ、見やすくまとめたのが、一般によく用いられている「報告式の損益計算書」です。

一方、前ページのように収益と費用の2面からフローをつかむ損益計算書のしくみにそって、左側に四つの費用、右側に三つの収益を並べる「左右両欄式(勘定式)」の損益計算書もありますが、営業損益、営業外損益、特別損益を流れとしてつかみにくいので、報告式が広く用いられています。(この点では貸借対照表と反対です)

A株式会社 ※
損益計算書 (自平成△△年4月1日 至平成○○年3月31日) (単位:百万円)

(経常損益の部)		
営業損益の部		
売上高		3,025,754
売上原価		<u>2,254,449</u>
売上総利益		771,305
販売費および一般管理費		<u>539,115</u>
営業利益		232,190
営業外損益の部		
営業外収益		
受取利息および配当金	61,132	
雑収入	<u>11,990</u>	73,122
営業外費用		
支払利息および割引料	32,795	
雑損失	<u>16,606</u>	<u>49,401</u>
経常利益		255,911
(特別損益の部)		
特別損益		<u>0</u>
税引前当期純利益		255,911
法人税等		<u>150,500</u>
当期純利益		105,411

五つの利益とその評価のポイント

➡売上総利益

ふつう粗利益とかマージンと呼んでいるもの。大きければ市場競争力大。

➡営業利益

(☞3-5)

会社本来の目的である営業活動の巧拙が分かる。

➡経常利益

(☞3-5)

借金経営の多い日本の場合には、会社の成績をこの利益により総合的に判断すべきである。

➡税引前当期純利益

(☞3-6)

➡当期純利益

(☞3-6)

この二つは、経常外の特別損益を含むので、会社の収益力をみるときに経常利益と合わせてみるとよい。

損益計算書の様式

- ①左右両欄式(勘定式)
- ②報告式

※日付について

貸借対照表の日付は、決算日などの一定時点の日付が入るが、損益計算書の場合はいつからいつまでの経営成績かが分かるように会計期間が記入してある。